

- (1) 教育と学校事務との関連～「領域」を推進するうえで、この活動が事務職員だけの課題にとどまっている現状をふまえ、事務職員の立場から教育と学校事務との関連について提起。

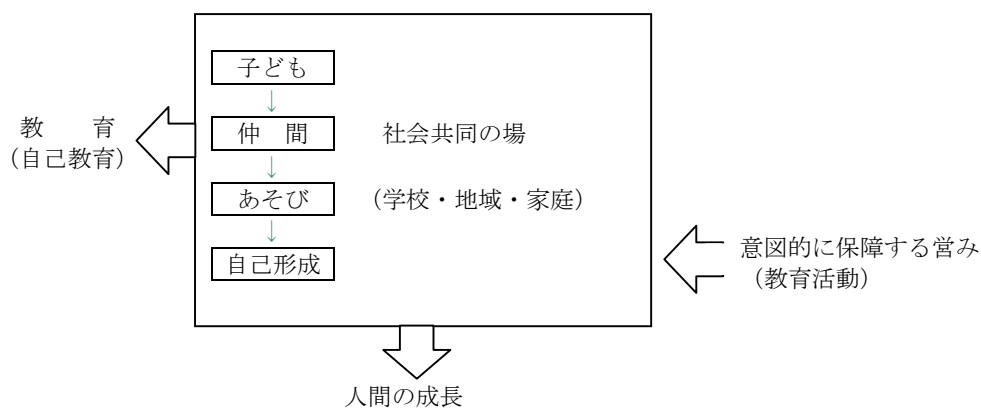
(1)教育

教育という学校で先生が児童又は生徒に対して行う学習のこと。つまり教育主体が習主体に一定量の教育内容を伝授し、習得させる営みだと考えられがちです(教授学習過程)。しかし、この教授学習過程は、確かに教育の一面ではあっても全てではありません。子どもは「あそび」を通して、そして大人は「労働」を通して色々なことを学び身につけていくように、人間の能力形成と教育は、「社会共同の広場」で営まれる生活実践の中でこそすすめられていくものです。ひとりの子どもを真に「個性」ある人間に育てあげていくためには、異なった「個性」をもつ子どもとの関係と協同の中でこそ教育すべきといえます。

現代は核家族化が進み、2人きょうだいほとんどであり、最近ではひとりっ子の割合が増えていくといわれています。また、遊び仲間も自分と同じ性格の者同志がグループをつくる傾向にあります。

しかし、自分とは異なった「個性」をもった人間とつきあい、そうした自分とは違う彼らと連帯して行動することが自分の成長、ひいてはお互いの人間的発達に協力していくこととなります。このような人間の成長と発達を意図的に保障していく営み、それが「教育」ではないかと考えます。そして、この営みを発展させるためのタタキ台として、教育主体が学習主体に一定の教育を与えていくという活動があるのです。

図のように、生活実践の中で学習主体が自主的共同的にすすめる自己形成を「自己教育」とし、私たちはこれを教育の原点と考えます。この子どもの成長には、子ども同士のグループ遊び(自然的な遊びと仲間の保障)の他に、親の生き方と家庭の役割が重要になってきます。父母が自らの生き方を問い直し、自主的な生き方や労働を人間化し、仕事と子育てを両立する生き方をめざすことが求められています。

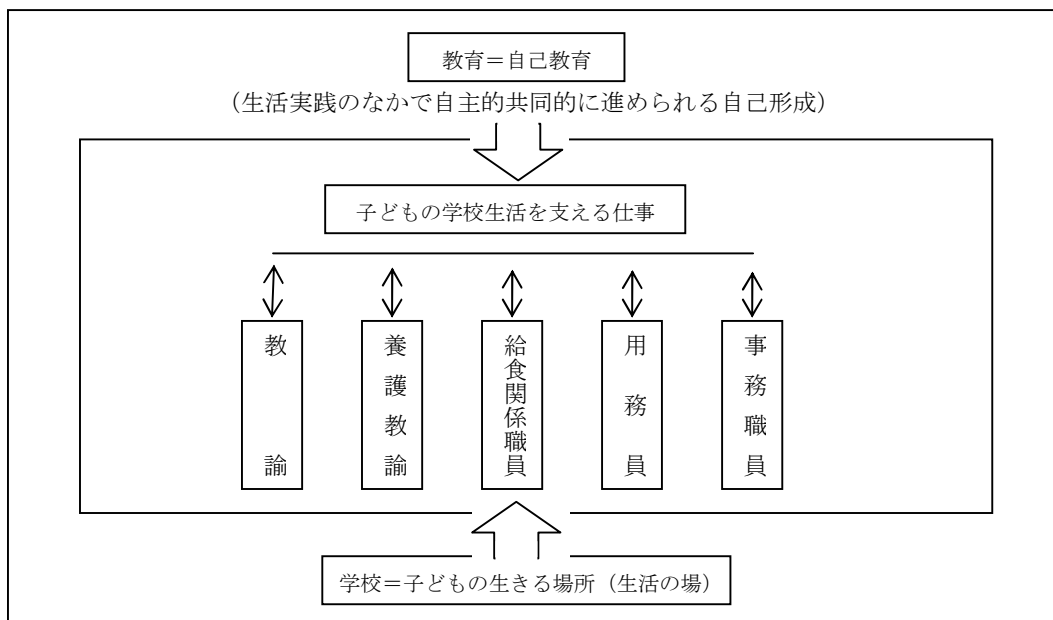


(2)学校

先に述べたように、教育主体が学習主体に一方的に知識や技術を与えるだけでは本当の教育とはいええず、子どもの自主性や創造性が尊重されない危惧が出てきます。そして、学校はツメ込みの教授の場に形骸化されはしないでしょうか。私たちは、こうした「与える教育」ではなく、子どもの自主性や創造性の尊重された教育を創り出していかななくてはなりません。子どもは自然とのかかわりの中で身体を鍛え、自然観・世界観を培っていくものです。また、大人とのかかわりのなかで人間の労働、生活、生き方を学び、さらに子ども同士のさまざまな集団のなかで、ともに行動する喜びを体得し、他者への思いやりを身につけていくものです。こう考えるならば、学校は「与える教育」の場ではなく、子どもの生きる場所、つまり子どもの「生活の場」として基本認識すべきではないでしょうか。

そして次に、子どもの生活の場所としての学校が存在するならば、まず第一に子どもの「いのち」と「健康」を守ることを、つまり生存権が保障されなければなりません。この視点により学校づくりを進めるならば、教諭のみでそれは行えるものではなく、さまざまな職種の人たちの協力と連帯のうえ

で校内組織をつくり、地域・父母とも連帯し、子どもが生活実践のなかで自主的・創造的に自己形成していく体制をめざさなくてはなりません。すなわち教育の原点を「自己教育」としてとらえ、学校を子どもの「生活の場」と考えるならば、教育の仕事は教授活動に限定されるものではなく、子どもの学校生活全てを支える仕事—学校保健や学校給食、学校用務など、そして学校事務も重要な教育の仕事としてとらえられます。



(3)学校事務

学校事務は、単に「書記」・「会計」的な仕事として、教育の価値形成や政策決定からはきりはなされた単純な形式的・機械的な仕事として一般的にはとらえられがちです。

しかし、今まで述べてきた教育・学校観を基本とするなら、学校事務は教育活動のための補助手段や、教授活動以外の「雑務」などといった学校事務観から脱皮し、教育活動そのものとしてすすめていかなければなりません。よって教材教具の購入、学校施設及び備品を整えることも大切な教育の一環であり、子どもの成長と発達<いのちと健康>に大きな影響を及ぼす要素となります。そこで、学校事務の最大の役割は、教諭・養護教諭・用務員等々の真の連帯を創り出し、協力しながら「子どもの生きる場所」「生活の場」としての学校づくりを推し進めていくことだと考えるのです。従来、「学校事務」の研究においては、このことを不問にして、量的つまり事務の総量を問題としてきたところに、その隘路があったといえます。

(2) 領域の考え方～本報告では、「領域」の活動を校内組織全体で推進するものとして、以下のように提起しています。

3 領域の考え方

(1)領域を考えるために

ア 校内組織全体のものとしての領域

昭和53年来提起されてきた「領域としての学校事務」は、学校事務を学校教育推進のための領域としてとらえ、学校財政・財務、教育情報の面から積極的に子どもの学校生活を支えていこうとするものです。そして、自己教育に原点をおき、教育を子どもの生活を支える仕事の総体とみるならば、領域の実践は、事務職員の個業の範ちゅうというよりも、他職種との連帯をどうとり結びながら推進していくかが課題となってきます。「学校財政・財務、教育情報（以下「財政、情報」という。）の領域を事務職員だけの課題から、学校全体の課題へと広げていかななくてはなりません。

領域（財政、情報のほかに、教育課程、研究・評価などがある。）は、学校教育推進のためのさまざまな要素のことであり、財政や情報も事務職員が中心となって進めていく大切な要素なの

です。ですから、学校予算のことも話題となる学校づくり、さまざまな職種の人たちが協力しあえる学校づくりを進めながらこの問題を校内組織全体の課題としてとりあげていく必要があります。

つまり、領域は「項目」と違い、即、事務職員の個業をもとにして職務内容の範囲を定めるという考え方ではなく、校内組織総体のめざす方向や他職種の人たちとのかかわりの中から、事務職員の役割を考えていくことになるのです。たとえば、財政の問題についていえば、教諭も養護教諭も学校予算全体を理解し要求活動に加わるなどして、校内組織全体のとりくみにしていくことが大切です。そうなれば、財政の問題は、事務職員の個業として処理ではなく、子どもの学校生活を支えるためにすべての職種の人たちが協力して進めていく学校教育推進のための領域となっていくことができるのです。

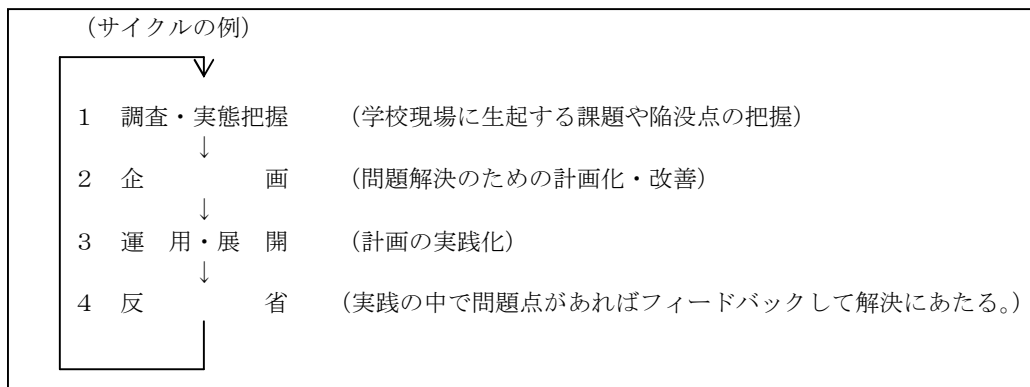
イ 財政と情報の関連性

財政と情報をひとつひとつの個業のように全く別個の領域としてとらえてはいないでしょうか。この2つは、ひとつの業務遂行のうえでの機能あるいは要素としておさえ、相互に関連をもたせながらすすめることが大切です。財政活動を進めるための情報活動もあり、情報活動を進めるための財政活動もあるからです。例えば、施設設備を整えていく財政活動の中にも、子どもの心身の状況や学習内容にかかわる内外の情報が機能していなければなりません。

(3) 実践化にむけて～また、実践化に向けた具体的活動例として「サイクル化による実践」「情報機能の整理」「領域の実践評価の3要素」を提起しています。

ア サイクル化による実践

先に述べたように、領域の推進は職種間の連携と協業をもとにすすめられなくてはなりません。そして、具体的に実践していくためには、その場の事務を処理していくといった傾向から脱し、調査活動や、情報活動を基盤とした企画性をもった活動にしていくことが大切です。この何年間かの研究発表で、サイクル化による実践が提起されていますが、これは、企画されたものが眼に見え、しかも、他の職種の人たちにも理解されやすい実践のひとつといえます。



イ 情報機能の整理

「情報」といった時、その広い概念によってわかりにくくなっている傾向があります。ここでおさえなくてはならないことは、全職員が情報源であり、それぞれが積極的にコミュニケーションをはかることによって、領域を推進していくということです。

また、盛んに言われている情報公開制度なども学校とは無縁といえず、今後、行政機関等、地域・父母等との間での情報流通が今以上に重要になってきます。

ウ 領域の実践評価の3要素

領域の実践を「生活の場づくり」「学校づくり」等へと発展させていくために、その評価を次の3要素によって行ってみることににより、意義を確認することができます。

(ア) 目的的存在

学校教育目標の具現化・教育課程の実践化・行事のめあて達成等の目的あるいは学校事務運営計画での目標・重点等との関連をもてたか。

(イ) 計画的である

学校事務運営計画の作成、サイクル化をはかるなど、企画性をもって計画的に推進することができたか。

(ウ) 組織的である

校内組織・他職種等のかかわりの中で推進することができたか。他職種にも理解しやすいかたちで取り組めたか。

(4) 課題～この中で今後の課題として以下のことが述べられています。

職務検討委員会が構成されてから7回の会議を持ちました。論議の基調は、現在すすめられている学校事務をどのように具体的に学校事務の中に意識化し、体系化して定着させていくかということでした。

現在、全道各支部の学校事務の考え方は、それぞれ表現は異なっても方向性は同じになってきています。したがって理論追求も大事ですが、全道各地で今まで積みかさねてきた実践を組織として検証し、確かなものとして広めていくことは非常に大事なことです。

今回は、このことをふまえ、新しい学校事務の考え方を事務職員ばかりでなく、全教職員にも広めていく重要な柱として学校事務運営計画に焦点をあてて、前段に領域の考え方等を整理しながら報告書を作成しました。その中で、校内組織のあり方、教育目標と学校事務等の問題ができましたが、検討委員会の限られた時間の中で整理がつかず、今後の課題とします。

今まで、私たち事務職員は試行錯誤をくりかえしながらも「領域としての学校事務」を芽ぶかせ、たしかなものにしてきました。残された課題についても、学校現場の中で実践、検証を深めつつ研究会等で意見を交流し、解決していく必要があります。